

## ■■■ 神の木 ■■■

### しめふじ

野生の藤の生態によって言うのである。木と木の間、あたかも注連の如く絡みかかったの言う。これを神の木または山の木と称して、伐ることはもちろんこれに触れることも怖れている。なお「しめふじ」には幾多の条件がある。木から木に渡りかかったものでも、根元が水辺池や川などの岸から上がったもの、または木より木に、川を跨いだものを最も神聖としたのである。そしてかりに以上の条件を具備せぬものでも、古木となったものはすべてこれに手を加えることは好まぬようである。それで一度「しめふじ」の柱となった木は、いかに価値のある材でも、これを神の木として諦めるようである。この「しめふじ」を過って伐って、怖ろしい神の祟りを受けた話がある。豊根村大字古真立の清水定吉という若い杣夫が、隣村下黒川の「ひやだに」の山に杉の伐木に雇われて入って、過って「しめふじ」の柱となった木を伐ったところ、その夕方からにわかに発熱して、一夜の中に顔面が赤く腫れてあたかも鬼の面のものであったと言う。そうして二、三日というもの熱のために苦しんで、ついに狂い死に死んだと言うが、当時「しめふじ」を伐った罰としてもつばら噂が高かった。なんでもその男の師匠の杣夫が、「しめふじ」の畏るべきことをわきまえていながら、弟子に伝えなかったのは、人の師としてかえすがえす手落ちであったという。

この「しめふじ」の代表的とも思われるものは、静岡県地内周智郡水窪からもろくず両久頭の村〔現、磐田郡〕にゆく途中の、俗に言う山王さんのうという難所にある。戸中川の峪を挟んで、数十間の長く橋のように連なっている。土地の人の談によると、今あるのは古木に新芽の絡んだものだそうである。三河地内、豊根村大字古真立字分地ぶんちの山の神の祠にも、物凄いばかりの藤が祠の上に網の如く殻み合っているのを見たが、もちろんこれを伐ることはない。

### ひどおし

神の木として山稼ぎのものなどに怖れられているものには、「ひどおし」と言う木がある。「ひどおし」は木の枝振りから言った名称で、種類には関係がないが、その条件から言って最も多いのは松である。幹が中途から二つに分れて、しかも両方が同じような形に成長したものを言う。したがって「ひどおし」は太陽の光が、その股を通すより出た名と言う。こうした形の木はもちろん古木でなければいけないので、山仕事に当る杣夫などは、この木に遭うことをひどく嫌って、手を下すことはない。それで元締め（山主）から別に酒

を買って、祀りをしてから伐るが、それでも事に当たるものは決していい気持ちはせぬと言う。この祭りを一におのだて（斧立て）と呼んで、根元を中心に四方に幣束を立て、まず地の神を祀るのである。また「ひどおし」の一説として、樹幹が曲り輪の形をなしたものとも言う。下津具村と上津具の境界にある松は（現在雷火のために枯れた）「ひどおし」の代表的のものであるが、その他長野県地内根羽村字田島、三河地方では北設楽郡武節村大字川手〔現、稲武町〕の武節川の川中にある松などは、最も典型的のものである。

## 天狗松

天狗松は諸方に多い名であるが、これを一に神休み木とも言う。山仕事に携わるものなどは、この種の木に遭えば一見してわかると言う。もちろん一般に言う傘松という類のものは誰にも判断がつくが、その他は一見しただけではわからぬものがある。その特長としては、枝が幹に比較して太いこと、そしてその枝は、どことなくされ（擦れ晒されている）ていて、何物かがときおり来てそこに留まった痕跡が感じられると言う。